

## 分科会報告：小学校・中学校の部

田島 久士

### 1. 「小学校外国語活動における教材内容の構造分析—文部科学省出版の Hi friends を対象として—」

発表者：今井智貴（東洋大学大学院）

#### 1.1 研究背景

- グローバル化の進展、外国語を学ぶ必要性がある。
- “Hi, friends!”は多くの学校で採用されている。
- “Hi, friends!”の問題点→学習内容間のつながりが弱い。

#### 1.2 先行研究

- どのような内容で構成されているか分析  
→教材内容間の構成についての分析はされていない。

#### 1.3 研究目的

“Hi, friends!”の教材内容の構造を明らかにする。

#### 1.4 分析方法

- “Hi, friends!”に含まれる教材内容を構造化する。学習内容の構造化にあたっては、佐藤隆博(1987)『ISM 構造学習法』明治図書「ISM 教材構造化法」を用いる。
- 素材情報間の関係を視覚的に分かりやすい構造チャートとして図式化、人間の概念把握や概念形成を基にする。
- Objective-Task Analysis を用いて分析
  - 手順 1 学習要素と学習課題を抽出し、学習要素と学習課題の対応リストを作成する。
  - 手順 2 学習課題を達成するために必要な前提学習要素や学習課題を分析者の教材観に基づいて対応リストを作成。
  - 手順 3 作成したリストを直接関係マトリックスにする。  
直接関係マトリックス：関係性の有無を 0 と 1 で示したマトリックス
  - 手順 4 階層的方向性をグラフにする。可到達マトリックスを作成する。  
数式 (J.N.Warfield (1976) *Social System* John Wiley & Sons, New

York, pp.204-284)を用いて演算する。

手順 5 CS 要素配置法を用いた教材構造チャートの作成

手順 6 作成した教材構造チャートの検討、矢印の追加、修正、及び確認

### 1.5 分析結果

結果① 学習要素と学習課題は主に 3 つのブロックに分かれている。(階層的有効グラフを見ると以下の 3 つのブロックに分かれているため。)

- 一般動詞、アルファベット、Be 動詞

結果② 学習課題間の配列について

- 教科書での順序と構造分析の結果に大きな違いはない。

結果③ 教材構造チャートにおける各レッスン間の学習要素の配列と“Hi, friends!”の配列には違いがある。

### 1.6 考察

- 全体的に活動が主であって、学習理解には重きが置かれていない。
- 小中連携を考慮すると、小学校の段階から学習理解を促す教材が必要。
- 教材構造が不十分である。  
英語学習に必要な学習要素の全体構造を把握し、学習させることが必要。

### 1.7 今後の課題

今後の分析として、時系列的な配列と学習目標の構造について分析する必要がある。

### 質疑応答

中 1 担当教員(都内公立中学校)より

Q: “Hi, friends! 1”の Lesson 9 はなぜ難しいのか？

A: “Would”は助動詞であるが、他の助動詞との関連性なしに学習しているので、ただの暗記になっている可能性がある。

Q: つまり文法シラバスという観点からして難しいということですか？

A: その通りです。

## 2. 「スペイン姉妹校との国際交流を通じた 1 年間の実践報告」

発表者: 茂木俊浩(光塩女子学院初等科)

### 2.1 発表趣旨

- 昨年に発表した内容の進捗状況の報告。
- 光塩女子学院初等科とベラ・クルス校の交流実践報告

## 2.2 在任校(光塩女子学院)について

- 建学の精神:カトリックの精神が基。スペインの修道会が創設。
- 創立当初より外国語教育に注力している。
- 英語は1~6年生に対して週2時間、ネイティブ教員と日本人教員のTTで行っている。
- スペイン語教室は3年~5年の希望者を対象に時間外で行っている。

## 2.3 姉妹校について

- スペインバスク地方にあるベラ・クルス校(Colegio Vera-Cruz)
- 3言語(バスク語、カスティーリャ語(スペイン語)、英語)を習得することが教育目標の一つとなっている。

### 1) 交流をはじめるまで、交流の目的

- 在任校ではグローバルな人材を育成することを目標としている。そこで、英語だけではない教育をしてはどうかと考えた。
- 私立だからこそできる教育特徴を生かすため、創設母体であるスペインとのつながりを生かすことを思いついた。
- 児童の視野を広げるためにも、異文化に触れ、自己を見直す機会を与えてはどうか。

### 2) 校内の説得

- 2014年夏休みを利用し、発表者が10日間の一人旅を実行。
- ベラ・クルス校の視察を個人負担で行う。
- 修道院への宿泊は在任校の校長が手助けしてくれた。
- スペイン文化を発表者自身が体験、自分のスペイン語のレベル確認。

### 3) 英語での交流を思い立つ

- メリット:在任校と姉妹校の生徒両方にとって、お互いの母語ではない言語での交流ができる。お互いの学習言語で媒介言語をつかって対等な関係で交流ができる。
- 現行のカリキュラムに付け加えることで開始できる。

## 2.4 実践報告

- 光塩初等科 4年生(100名)の交流

### 1) 1年目

- クリスマスカードの作成・交換  
→ 姉妹校の児童の写真を見て、同じようなスモックを着ているなど気付く。
  - バレンタインカードの交換
- 2) 2年目
- とび出る絵本の作成
  - バレンタインカードの交換  
→ 2年目は英語で児童が自由にメッセージを書く(英語は直さない)。
- 光塩初等科 6年生の活動
- 1) 1年目
- 駐日スペイン大使館を訪問  
→ スペイン料理を体験
  - スペイン語の勉強会(スペイン語検定への挑戦、スペイン語やスペイン文化の習得)
- 2) 2年目
- 桃太郎のペープサートの作成(桃太郎を日西両言語で物語る)  
→ 低学年に見せる(各学年団の教員に、作成したペープサートを勧めた)

文法は気にせず作ることを大切にする。

動画の編集は教員が行う

## 2.5 保護者・児童へのアンケートの実施・結果

- 1) 4年生・5年生の児童へのアンケート
- スペインの子どもは自分たちよりも英語が上手だと思うか  
→ 50%の生徒が同じくらいと回答
- 2) 5年生保護者アンケート (2016年7月に実施)
- 姉妹校交流に意味があると思うか?  
→ 意味がある71%、まあ意味がある29%
  - 今後希望する活動は?(自由記述)  
→ TV電話、ホームステイ、個人的な手紙の交流など。  
スペインの子どもをホームステイ先として受け入れたい。  
→ 保護者がより積極的な交流を期待していると考えられる。

## 2.6 今までの振り返り、今後の展望

- 2013年(4年前)発表者がスペイン語の勉強を始めた。  
将来、交流したときに通訳なしでやりたいと考えたため。
- 2014年 単身でスペイン訪問
- 2015年 6年有志の児童と活動を開始
- 2015年秋 姉妹校の児童間交流スタート
- 2016年 校務分掌プロジェクトとして「スペイン」が認可される。
- 2017年 クラブ活動として国際交流メルセスクラブ開始予定
- より深い交流を今後考えている。
  - お互いの国の文化や言語についての理解を深めたい。  
他機関との協力を深め、日本でできる文化体験を増やしていきたい。
  - 交換留学  
お互いの国に赴き、ホームステイなど現地の文化を体験させたい。

#### 質疑応答

Q: 小学校教員(平塚市)より

- バスク語話者はスペイン語をどれくらい話せるのか?
- アンケートに関して、光塩の子どもたちの姉妹校の英語のレベルを判断する材料はカードだけか?
- アンケート結果の共有は姉妹校とはしているのか?

A:

- スペイン語は選択科目となっている。カスティージャ語を主にして、スペイン語は選択となっている。
- 児童はカードを基に判断した。カードに自分も習った単語があるなどの発見をしていた。
- アンケート結果は校長を通じて行い、データをドロップボックスに入れて交換した。

○小学校教員より

Q: スペインのバルセロナの小学校と交流を試みたことがあるが、教員の協力を得ることに苦労した。大変だったことを聞きたい。

A: 教員の負担に関しては他の教員の負担をなくすため、自分で出来ることは全てやっている。

Q: 交流はカードの作成だけか? 英語の差異は感じなかったのか? 筆記体で読めなかったのでは?

A: カードの字は大人でも読めなかった。4年生の担任が届いたカードを配り、子ども

からなんて読むのという質問がでたが、もらったという事実が大切。交流は英語でやりたいと考えている。担任の授業でやっている。クリスマスカードとバレンタインカードをやっている。

### 3. 「文化交流を目指した英語科の実践「一語一会話・輪・Wow」

発表者：伊藤智子（練馬区立貫井中学校）

#### 3.1 交流実施生徒について

- 生徒数 328 名
  - 素朴で落ち着いている生徒たちである。特別な支援が必要な生徒も多くいる。落ち着いているが、ハングリー精神に欠け、受け身の姿勢が目立つ。

#### 3.2 「一語一会話・輪・Wow」の活動について

- 中学 3 年生を対象に継続的に行ってきた活動である。
- 修学旅行に行く機会に海外からの観光客に会話をする。
- 小学校の外国語活動で学習した内容、中学で学習した英語、マナーなどを生かす機会とする。3 年間の集大成である。
- 目的：英語の技能以外にも世界にいろいろな人がいると教えていきたい。この活動を通して話しかける、教えあうなどコミュニケーションスキルを磨いてほしい。

#### 3.3 実践のあらまし①

##### 1) タスクの概要

- 海外から日本を訪れている外国の方にグループごとにインタビュー。
- 自由に質問する。共通の質問は、“What’s your dream?”  
→修学旅行後に全体でインタビューの結果をシェアする。

##### 2) タスクの実施

- 京都市内の班別活動の際に行う(全部で 24 グループ)。
- 学年全体の取り組みとして行う。

##### 3) 実施までの準備

- 日本文化紹介パンフレットをグループで作成  
→インタビュー協力者にあげる。

1 グループ 3 人。一人一人がパンフレットの一部を作成し、一つ扇子の形に

する。形式は、学校についての紹介が表面、日本文化について裏面として  
いる。

- インタビューの練習（話かけられない生徒に対して支援）
- 4) 事後指導
- 京都市内での本番のインタビューの後、レポートを作成し、スピーチをさせる。
- 5) Happy surprise
- パンフレットの裏面に学校の連絡先を記していた。外国人観光客の方から  
本国に帰国されてから手紙が届いた。
- 6) 活動の意義
- 日本文化について意識の涵養  
着物やてんぷらだけでなく、日本の良い点（日本のお菓子など）を生徒が  
発見できる。紹介したい内容を1年生の頃から考える機会を与える。

### 3.4 実践のあらまし②

#### 1) 使用した授業の時間とその配分

- パンフ作成 (90 分)  
パンフ作成 20 分→帯学習の 10 分+パンフ作成 40 分、担当者決定、随  
時添削及びチェック→帯学習の 10 分、パンフ作成 30 分、班でチェック
  - レポート作成  
班長が作成し、プリントにインタビュー協力者の国に印をしてもらう。サイン  
をもらう。
  - “What’s your dream?”に対する回答のまとめ  
葉っぱの形をした紙に生徒が自分の夢を英語で書く。インタビュー協力者  
にも書いてもらったものを校内に掲示する。
- #### 2) 忘れたところに返信あり。
- フランス、ポーランド、ロシア、アメリカから返信を受け取った。
  - 今年はオランダから受け取った。  
→シンプルな英語で書いてきてくれたので、定期考査の読解に活用。
  - 届いたメッセージには教員が届いたメッセージの写真を撮る。
  - 返信に対して、一人一枚カードを書く。自己紹介、伝えたい日本のものを決  
めて書く。どうしても英語で書けなければ、日本語も可能。
  - クリスマスカードが届いた時は年賀はがきを送った。
  - インタビュー協力者にロシアで教師をしている方がいた。ロシアの学校からメ

ッセージが届いた。

→先方の学校に掲示できるようにメッセージを作成した。

### 3) その他の交流活動紹介

- 英語部の活動:ロシアの生徒と交流

質疑応答

Q: 初めて何年になるか?

A: 20年前から始めている。

Q: 卒業後、生徒にどのような変容があったか。

A: 卒業生に対しての追跡アンケートは行っていないが、卒業生にはいろいろな反応があったようだ。イギリス人と結婚したと同窓会で報告があった。交換留学に行ったり、個人的にホームステイに行ったりした生徒もいた。

## 4. 「韓国・釜山の中学生との文通—真の国際交流を考える—」

発表者: 柏村みね子(文京区立音羽中学校)

- 冒頭発表者より

交流は文脈、ストーリーが大切。伝えたいこと、聞きたいことがあることが大切であると、茂木先生の発表を聞いて感じた。

- “Friends”(新英語教育研究会で作成した歌)の歌詞を発表者が紹介発表者の中1の最初の授業で教えている。

### 4.1 交流を実施した生徒について

レベルに差がある。意欲、経験でバラバラの生徒たちを持っている。その生徒たちにこの歌(“Friends”)を教える。ここでいう Friendsとは誰かと生徒に問いかけ、生徒はイラストにする活動の展開をしている。

### 4.2 国内の交流について

- 国内の被災地の中高生との文通

→ ノート4000冊を石巻に送る。中1が英語でメッセージを書いた。

### 4.3 釜山の中学生との交流

- 新英語教育研究会と姉妹関係にある研究会で3人ずつ英語教師の交換をしている。生徒同士も手紙の交流をするようになった。

#### ➤ 活動内容



- ピースメッセージを送る

→ 授業でならったことを基に生徒は自己表現をする。他人のために何かを書くことを生徒に求め、評価には影響しない。

#### 4.4 ニューヨーク(NY)の高校生へのメッセージ送付

- “One Seed”という歌を用いる。

→ “One Seed”の詩の続きを生徒が作成。歌詞に沿って、“One ...”に続く表現を使った一行詩を生徒が作成し、NYの高校に送る

例) One teacher can make a person.

#### 4.5 生徒の反応

- 友達ができる喜びを感じ、学習への気持ちが変わり、行動も変化した。

協働学習を通じて生徒同士が分からないから聞き合う活動をした。

PTAの保護者も協力してくれ、ハンゲル語が分かる方の力をお借りした。

- 日韓関係が悪いとき

“Dokdo(竹島) is mine”というメッセージが届いた。

→ どういった返事をするか生徒皆で話し合い、“Why don’t you share this island with us?”というメッセージを送ろうという結論になった。

- 外国語としての英語を学ぶ意味を生徒が実感できた。

文化を知り、友達を持ち、何で英語を勉強するか生徒が自分で見つけることができた。

実用的、教養的目的では生徒たちは納得して英語を勉強しない。媒介言語としての必要性を生徒が体験し、学習することで、生徒は英語を勉強する意味を見出す。

生徒の作文より:

“I study English to keep peace of the world by communicating with people of various countries and make my dream to become a pilot come true”

- 韓国の生徒にとっての英語学習

韓国の生徒は日本との交流に乗り気でない生徒も多かった。

#### 4.6 オリンピック・パラリンピックは国際理解教育といえるのか？

オリ・パラ教育が東京都では義務化され、国際交流がオリ・パラ教育の一環としてカウントされるようになった。勤務校の校内でも急にピースメッセージの活動に興味を持つ教員が増えた。しかし、これでは 3F (Food, Fashion, Festival)で終わってしまうのではないか？言いたいこと、伝えたいことがあるから交流をするのではないか？教員間で

交流を増やし、生徒の真の交流をさせたい。

#### 質疑応答

大学教授(韓国語教師)より

Q: “Dokdo is mine”というメッセージが届いた点に関して。直接顔を見る交流をすれば、こういったメッセージはないと感じている。先生の生徒はスカイプなどでの交流予定は今後ないのか？生徒は手紙のやりとりはしないのか？

A: 設備的に難しいのではないかと感じている。確かに顔を見た交流ではないのかもしれない。先方の学校は3月に学校が始まり、習熟度別授業をしているので、1年間継続的に交流ができなかった現状がある。また、教員を介さない生徒同士のメールのやり取りは、在学中はさせていない。ネット上での問題を避けるためである。

神奈川県教員より

Q: 韓国は小学校4年から英語を始めている。英語のレベルの差を感じることは？

A: 少し先方の学校の方が、英語はできている気がするが、届く英語のメッセージは添削をしたものではないので、謎解きのように生徒たちはメッセージを読んでいる。韓国の子供も be 動詞を抜かしてしまうなどのミスはある。

臼山利信氏(筑波大学教授)より

Q: 聞きたいこと、伝えたいことを発掘する工夫はどのようにしているか？

A: 韓国のことを扱った題材を読んでから、手紙を書いたり、パレスチナなど平和のことを学習した後に **peace message** を書いたりしている。また、生徒同士で書きたい内容を話し合ってから、個人の活動として手紙を書いたりしている。向こうの手紙に答えるときには書きたいことがあるようだ。

\*当日記録して下さった押尾江里子さんによるところが大きく、感謝申し上げます。

(大田区立糀谷中学校)